

# イ草を余すところなく生かしきり、 伝統に新たな生命と記憶を吹き込む

須浪 隆貴  
岡山／イ草かご職人

## イ草を主役に新たなモノづくりを目指す

当初サンダルを製作する予定だったが、得意分野を生かした方がいいと、「いかご」を新たなアイデアで発展させたかごバッグの製作を目標とした。サポートメンバーの川又俊明氏からは「編み方の組み合わせや持ち手が異なるバリエーションを」、さらに「かごの巾が見えないようにしてみては」「地域で有名なデニム素材を取り入れたら」「デニムはジーンズが一番似合うという強い固定観念があり、使うのをためらっていたが、組み合わせる意味を考えていた時、取引先からデニムの残布をもらったのをきっかけに、プランは一気に加速した。製作工程からどうしても出てしまふ残布と「いかご」のルーツである畳表にならない短いイ草。素材としてのありようが似ている二つを、古い民具によく用いられていた裂織（さきおこみ）のよう手法で組み合わせる。「素材の特性（残り物）+受け継がれた手法」は須浪さんにとって理想的なストーリー。「指摘されなければ思い浮かばなかった。とてもありがたいアドバイスだった」と振り返る。

ただ、イ草とデニム生地の組み合わせ方やバランスはイメージできたものの、なかなか想像通りにできない。デニム生地には裏表があるが、生地織りは裏側を上にして進めるため、仕上りの感じがつかめないのだ。さまざまな織り込み方を試行錯誤の末、思い通りに完成したのは締め切り直前だった。普段は見た目を重視してイ草で作っている持ち手も肩掛けにできるよう長めにし、丈夫な革を採用。プレゼンテーションでは高く評価され、特に、熱心に指導した川又氏からは「すばらしいプロダクトに仕上がった」と称賛された。

プロジェクトを通して感じたのは、伝統の手法やサイズ感を超えることの難しさ、新しいことを考える難しさ。普段考えたこともなかった素材が一つ増えるだけで選択肢が広がり、どう選ぶのかセンズが試されているような怖さを感じたという。一方異なる価値観や他方向からの意見は須浪さんの視野を大きく広げた。風土に根付いたモノづくりが好きという須浪さんの工房には、陶器、民具、ガラスなど多彩なモノが資料として収集されており、壁棚を占めている。それらを参考に、「いかご」や七宝編みで作る「びんかご」など、伝統の形を守りながら、新たな視点で他素材との組み合わせや、染めにも挑戦したいと意欲的だ。ただし「素材の主役はあくまでもイ草」と言い切る。「いかご」作りを本格的に始めて約5年。このまま一人ですっきり作りたいという気持ちもあるが、自分だけの仕事にすべきでないとも思っている。「このプロダクトやイ草製品を生活用品としてもっと使ってほしい。身近な存在だったイ草の記憶を伝えるモノづくりを目指したい」と熱く語る須浪さん。その世界がどう広がるか楽しみだ。



「いかご」を編み上げる須浪さん

## 祖母から受け継いだ 手仕事の技

かつてイ草の一大産地だった岡山県南に工房を構える須浪さん。明治時代から続く「須浪亭商店」の5代目だ。実家は創業以来、染色したイ草を多彩な模様織り込む「花ごぎ」を製造していたが、須浪さんが小学6年生の時、父親が急死。廃業の危機を救ったのは、祖母が本格的に作り始めたイ草で編む手提げかご。「いかご」製造だった。学生時代から祖母の手ほどきを受けて「いかご」作りを始めた須浪さん。技は一度途絶えると新たに始めるのは難しい、家業として続けようと20歳で看板を継いだ。



エリアセッションで川又さんと

## LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催：LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

本プロジェクトは2016年、放送作家として「料理の鉄人」などの多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェクトのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏(建築家・東京大学教授)、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト)、アト・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーに発足。

昨年度は、52名の匠によるプロダクトが誕生。若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への採用や、ロックフェラー家主催のチャリティイベントへ出品されるなど注目を集め、匠自身も「Webメディアへの掲載など目覚ましい活躍を見せている。

2年目となった今年は、全国47都道府県から計51名の若き匠が選出。昨年度、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフセッションを皮

## レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援



1月17日、プレゼンテーションにて

また、商談会の終盤ではビームスジャパンとのコラボレーション企画「LIFE with NEW TAKUMI」新「匠」新しい暮らし」が発表されるなど、プロジェクトも進化している。「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。「LEXUS」が掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。岡山県選出の匠、イ草かご職人の「須浪隆貴」さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

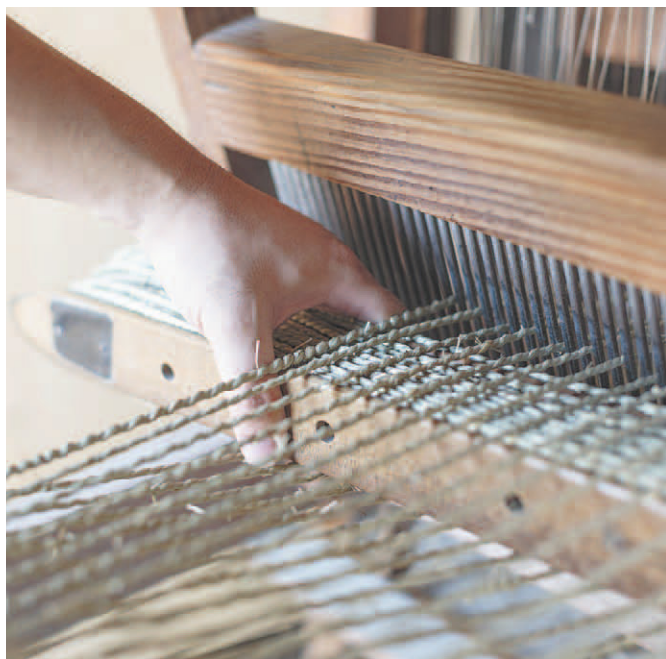
## 広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー  
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。伝説の深夜番組「カノッサの屈辱」でその名を世間に広め、「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。



手作りの織り機で「いかご」生地を作る



イ草で作った「いかご」



イ草を纏った縄

岡山県南は古くから干拓された土地が多く、塩害に強い作物としてイ草や綿花が多く栽培され、ともに一時は全国一の生産量を誇った。イ草は畳表や花ごぎなどの商品に、綿花は繊維産業を発展させたデニム生地として初の国産ジーンズに結実した。今デニム生地は世界的に評価されている。一方、イ草の生産は衰退したが、当時から畳表にならな

い短いイ草を活用してさまざまな生活用具が作られていた。「いかごもその一つだ。買物などに重宝されていたのを、今の暮らしの中で使いやすいサイズと形に改良。現在、岡山県内で「いかご」製作販売しているのは須浪さんだけという。

「いかご」はイ草を縫い合わせて縄にしたものを古い木製の織り機で生地状に織り、手編みでかごの形にしている。工程の中で最も集中力を必要とし、かつ、人に任せたくないのが織りの作業。不揃いな箇所を除いたり、縄の太さによってサイズ、段数、ゆがみを調整したりと、非常に気を遣う。持ち手をつける工程はさらに細かな作業が要求される。全工程を一人でこなすため、製作できるのは1日に3個ほど。量は少ないが、使いやすいサイズと丁寧な手仕事ぶりにファンは多い。「かごには素材や編み方など、地域性が最も表れる。奥が深く作るのが楽しい」と語る。



須浪 隆貴  
岡山／イ草かご職人

1993年岡山県倉敷市生まれ。1886年に創業した須浪亭商店5代目。祖母からかご作りの基礎を習う。学生時代はジュエリーを専攻しており、同時に独学で靴づくりを行う。現在は「いかご」と呼ばれるイ草の縄を使用したかごを製造しており、小売店への卸販売をメインとし、個展、グループ展などを年に数回実施している。また、百貨店などでの催事やクラフトフェアなどにも参加。



完成プロダクト「いかご 布裂織込(ぬのさきおこみ)」